

市街地の機能は、商業、工業、交通、その他行政教育などがある。この中で、対外的に重要なものは、やはり交通機能である。那須扇状地の交通の中心は大田原市であるが、東北本線、国道4号線の走る西那須野町は交通上の中継点、通過点として重要である。東北本線の乗降客は急激な増加を示している。通勤通学者、普通客の他、塩原温泉への観光客の増加も見逃せない。道路交通も非常に増加している。

周辺農村地域では、市街地周辺部や道路沿いに農地の宅地転用が次第に激しくなっている。米作のゆきづまりと共に、水稻作一辺倒からの脱却を試みる農家も出てきてはいるがまだ、水稻の占める割合は高い。周辺農村地域は次第に都市的要素を増し、変化しているといえる。

はじめに、西那須野町は内陸部にありながら人口が増加していることを述べた。この人口増は、西那須野町自体の産業の発展によるものではなく、むしろ西那須野町の持つ交通位置により住宅地としての傾向が強くなり、周辺地域への労働力供給地としての性格が強まったためのものであるといえることができる。

現在、西那須野町には、様々の都市開発計画がたてられ、その一部は実行に移されている。西那須野町は、いままでよりもはるかに早い速度で、今後変貌していくものと思われる。

都 市 化 と 地 域 社 会

—兵庫県西宮市の生活環境の実態と問題点—

山 形 雅 子

人口移動は主として経済的な理由によるものであり、人間は常によりゆたかな生活水準をもとめて移動する性向を持っている。そこで人口は、大規模な産業が集中し、経済社会の発達した、そして生活水準の高い大都市へと移動することになる。このような人口移動いわゆる都市への人口集中が、日本において特に激しくなったのは、昭和30年以降であり、西宮市においてもこの時期の人口移動は顕著であり、転入者数の増加は著しい。このように西宮市は、大量の人口が流入することにより都市化されてきたと言えるが、大規模工場も少なく、産業都市としての性格の弱い西宮市においては、工業の盛んな都市にみられる吸引力は考えられない。すなわち西宮市の人口増加の主要因は産業都市、大阪、神戸の中間に位置しているということ、つまり、住宅都市としての立地条件によるところが多い。生活環境は、普通、住民の住生活を支える有形、無形のあらゆる外部的条件を意味すると考えられる。そのため、その内容は複雑多岐であるが、これら生活環境条件のうち、西宮市にとって特に問題があると考えられるものを、その悪化問題が切実に提起されている市街地

域を中心にとりあげ、地区別評価を行い各地区の問題点と市民意識との関係を把握した。その結果、市内は阪急神戸線以北と、以南（旧市街地）に大きくわけられた。前者は純住宅地域で、土地利用、公害問題においては、現在のところ問題ないとみられるが、後者は住宅、商業、工業の混合地域で、これらの問題が切実である。住宅、都市施設は、北南をとわず、市の問題となっている。

水産加工業の変貌過程についての地理学的考察

——銚子市をフィールドとして——

吉原和子

銚子市には開干し、煮干等の一般加工から節類、缶詰、煉製品、魚粉等と、水産加工業が全面的に立地し、特に開干しさんまのメーカーとして全国的に知られている。何故、この水産加工業が特化しているという経済地域性が発生したのか。まず現状を明らかにし、一定程度の視座を確立した上で、発生から現状に至る変貌過程、それを規定する地域内部の矛盾をさぐりたいと思う。

第二篇 水産加工業の現状

①、開干さんま、開干さば、桜干、煮干、丸干のいわし等々、さんま、いわし、さばの加工が中心である。特に低次加工品のうちでも手間のかかる開干がさかんである。原料の地元依存度は、他の県内産地と比べると小さい。昭和40年頃から、生産数量の停滞に対して、生産全額の伸びが顕著となってきている。これは品目の高級化と、物価騰貴によるものと思われる。

②、6、7、8月が低調期ではあるが、周年操業を行なっている。専業率は、千葉県平均の2倍弱であり、又、経営規模は相対的に大きい。1企業当りの平均従業員数は、約9人である。原料入手がまだまだ不安定であるため稼働率の変動大となり、従って、臨時労働者の比率が大である。

③、雇用労働力中、婦人労働は80%を占め、漁夫及び農家の主婦が大半である。1人当り現金給与額は、醤油醸造業の20%であり、賃金コストが低く、低賃金であることがわかる。

④、戦前からの操業は全企業中約9割でありそのうち、明治年間操業は半数を占める。資本はもとも少額で済み、機械化は大同小異であったものが、現在は、冷蔵庫の導入を軸として、企業の両極分解が進展している。

⑤、場所的分化を見ると、開干さんま製造業者は、一般に零細であるが利根川河岸の漁業発生地の1つであり、先進地帯である家屋密集地に集中している。又、いわし加工を主とする比較的大規模な工場は、先進地帯の周辺部に戦後進出してきている。又、ここは、宅地化と競合関係にあり、汚水、悪臭が公害問題となっている。